
小学生日誌番外編

銀河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小学生日誌番外編

【Nコード】

N7620D

【作者名】

銀河

【あらすじ】

毎週金曜日、コナンは奇妙な夢に悩まされていた。（原稿バージョンの誤りにより全面差し替え3/1）

見られた少年

土曜日、朝食の後片づけが終わると、哀は、ちょっと仕事があると言って地下室へ降りていった。

コナンは哀を見送ると、博士のいる書斎へと向かった。

「なあ博士、ちょっと相談があるんだけど」

「ん、なんじゃ？」

博士が振り向くと、コナンは妙に真面目な顔をしていた。

「…どうした？」

「それが、実は、変な夢を見るんだ」

「変な夢？」

「ああ…その、夢の内容はともかく、毎週金曜日の夜に限って、同じ夢を見るんだ」

「ほう、どんな夢じゃ」

「それが…その…」

下を向いてもじもじするコナン。

博士は優しそうに笑った。

「なるほど、エッチな夢でも見たか」

コナンは軽く首を縦に振った。

「ははは…別に心配はいらんじやろう。お前の精神は思春期真っ盛りじゃが、体は第二次性徴もまだじゃからのう。自分では気が付かない欲求不満が、どこかにたまっておるんじやよ」

「でもよう、毎週金曜日の夜、毎回だぜ。他の夜にはまったく見ないんだ。しかも、毎回毎回内容は同じなんだ。灰原が俺を…」

ますますうつむいて真っ赤になるコナン。

微笑んでいた博士も少し思案顔になった。

「ふむ…ちよつと脈を」

博士はコナンの手を取って脈をみた。

「脈なんかみてどうするんだ？」

「脈をみれば万病がたどころにわかるんじゃ」

「アーユルヴェエダか？」

「ほう、良く知っとるのう」

博士の顔に疑問の表情が浮かんだ。

「…何か病気なのか、俺？」

「いや…」

博士はコナンを真剣な表情で見た。

「ちよつと見せるんじゃ」

「え？ 何を」

「ズボンとパンツを脱いで」

思わず後ずさりするコナン。

「お、おい博士、冗談だろ」

「何が冗談じゃ。いいからちよつと見せるんじゃ」

博士は非常に真剣な表情だった。

不安になるコナン。

「…な、何かそっちの病気なのか」

「わからんから、見せろと言っておるんじゃ。わしは医者だぞ。お前も知つとるじゃろう」

コナンは博士から医師免状を見せてもらったことがある。さらに博士は、工学博士号の他に医学博士号も持っていたのだ。

「あ、ああ…わかったよ」

コナンは恥ずかしげにズボンを下ろした。

博士はじつと見つめた。

「お、おい…博士…」

「動くなよ」

博士は手で触れた。

そして、顔を近づけて、くんと臭いをかいだ。

「うわあ！」

大きく後ずさる。

「なな何やってんだよ、博士！」

博士はまったく真剣そのものだった。

「何って、恥垢の臭いを確かめたんじゃないよ」

「ちちちこう？」

博士はじつとコナンを見た。

「新一、お前、射精しとるな」

「じゃ、射精？」

「そうじゃ。昨夜風呂に入っておるから、その後じゃな」

コナンはぶんぶん横に振った。

「ち、違う…そんなことしてねえぞ」

「ならば、今朝、夢精しとらんかったか？」

「そんなことしてねえ！」

「ふむ…」

博士は一寸考え込み、そして顔をあげた。

「新一、本当に、何も心当たりがないのか？」

「ない！ 絶対にない！ だいたい、射精できるなんて今の今まで知らなかったんだぜ！」

「本当に本当じゃな」

「本当だよ！」

「ふむ…となると、考えられることは一つしかないが…」

博士は卓上の電話機に手を伸ばした。

「哀くん、すまんがちょっと話がある。書斎に来てくれんか」

「ちよ…おい、何で灰原を呼ぶんだ？ …まさかアポトキシン4869がらみで何か！」

コナンはあわててズボンをはき直した。

「いや…」

そういう博士の表情は、コナンをますます不安にさせるほど厳しいものだった。

やがて、白衣を羽織った哀がやってきた。

「おお、哀くん…ふむ…座って話そうか」

博士はそう言々と書斎を出て居間に向かった。

哀は博士の態度を不審に思い、コナンを見た。

「どうしたの？ 何の話？」

コナンは恥ずかしいような怯えるような、まことに奇妙な表情をしていた。

「俺にもよくわからない」

「どういうこと？」

哀は露骨に怪訝な顔。

「早く来なさい」

博士の呼ぶ声。

二人が居間へ行くと、博士はすでにソファに座っていた。

「さ、二人ともそこにかけて」

哀とコナンは並んで博士の正面に座った。

博士は大真面目な表情だった。

「哀くん、君は地下の冷却システムで君自身と新一の血液サンプルを保存しておるの」

「ええ」

哀は自分自身とコナンの血液を毎週一回採取して分析の上保存していた。アポトキシン4869投与後、体がどう変化しているのか追跡調査するためである。

博士は哀をじつと見た。

「それだけか？」

「…それだけって？」

「新一の精液を採取して保存しておらんか？」

あまりのことに、息さえ止まるコナン。首をゆるゆると哀に向ける。

哀は真面目な顔をして、視線をやや下に向けたまま黙っていた。その様子が全てを物語っていた。

「は、灰原、お、お前！」

「ごめんなさい」

哀は顔を動かさないまま、つぶやくように言った。

続く言葉も出ないコナン。

「なぜ、新一が射精できる体だとわかったんじゃ？」

博士は平静に質問した。

「血液中に、成熟した精巣からしか分泌されないホルモンが存在したから」

「ふむ…他のホルモンとのバランスを欠いておる、ということじゃな」

「ええ」

「だ、だからってな、お前！」

とは言いかけたものの、言葉が続かないコナン。

「まあ待て、新一。これはとても重要なことなんじゃ」

博士は真剣そのものだった。

「いいか、新一、ホルモンの異常というのは命にかかわることもある重大なこと。仮に命にはかわらんとしても、こと男の精巣に関するものだとすると、将来子孫に影響するかもしれん…それどころか、子孫を残せん、ということもあり得る」

「そ、そうかもしれねえけど、その、やっていいことと悪いことってのがあるだろ！」

博士は興奮するコナンから視線を外して、哀に向けた。

「哀くん、新一の精液に精子は含まれておったのか」

「ええ…数的には受精するに充分…精子も健康そのもので受精能力にも問題なかったわ」

「なるほどな」

「だ、だったら一回調べれば終わりだろ、何で毎週毎週…」

「新一、今現在お前の精液が正常なものであったとしても、体の他の部分は第二次性徴以前の状態…これから第二次性徴が発現してくると、精巣がどうなるか、まったくわからないのじゃ…それで継続して採取しておったんじゃな」

哀は小さくうなずいた。

「ふむ…仮に今後新一の精液に異常が現れたら、保存してある精液

の中から最も状態の良いものを選んで人工授精するつもりだったんじゃないろう。新一にはないしよで」

哀は黙っていた。それが彼女の答えだった。その答えの中に含まれる大きな大きな前提、コナンはすぐに理解した。

「ふむ…そうか…」

博士は目を閉じた。

哀は深くうつむいたままだった。

「ごめんなさい、工藤くん…殴って気が済むのなら私を殴って…私のも見せるって言うなら…」

ふっとコナンは笑った。

「今さらそんなことしたってどうにもならないよ…ただ驚いたただけだ…ふふ…やっぱお前はすごいやつだな」

博士は目を開けてコナンを見た。

「新一…」

「博士、コーヒーで一服でもしないか？」

コナンは普通の明るい表情に戻っていた。

「ん？ ああ…そうじゃな」

「よし…じゃあ、お前も手伝え」

哀の手を引っ張ってコナンは立ち上がった。

「あ、ちよっと…」

逆に驚く哀。

「いいから、来いって」

コナンはいつもと同じ手慣れた手つきでコーヒーミルのハンドルを回していた。

哀は、コナンの表情を気にしつつ、カップとソーサーを戸棚から取り出す。

「正直言って驚いたよ」

挽かれたコーヒーをネルに丁寧に入れるコナン。

「俺のことより自分のほうがデリケートだろうに…そこまで俺の事

を気をつかってくれるなんてさ」

「怒ってないの？」

「怒ってどうなる…そりゃまあ、かなり恥ずかしいけどな」

「本当にごめんなさい」

「もういいよ…気にするな。その代わり、今後は自分でやるから、道具を貸してくれ」

哀もようやく笑顔を少し取り戻した。

「ふふ…あなたって…」

「何だよ？」

「いいえ…あなたのことはかりじゃ不公平だから私のことも言っておくわ。私の卵巣と子宮は平均的な七歳児の状態。ホルモンにも特段の異常はみられない…これからどうなるかはわからないけれど」

「そうか…それで、俺のことが余計に心配になったってわけだ」

哀は黙ってうなづいた。

「カップ、暖めてくれ」

「え？…ええ」

コナンはネルをいつものようにポットにセットすると、手際良く湯を注ぎ始めた。

哀はそんなコナンを頼もしいな目で見ていた。

見られなかった少女

日曜日、博士は学会に出かけて留守だった。

昼下がり、コナンは自分の部屋から一階に降りてきた。

と、哀が居間の長手ソファの上ですやすやと寝ていた。

無邪気な寝顔、あまりにも無防備、ワンピースの下からわずかに白いショーツが見えている。

コナンは物音を立てないようにそっと近づいた。

（ま、待て…俺は何を考えてる？ …何で忍び寄るような真似を！）

「…灰原、おい灰原…」

哀はぐっすり寝ているようだ。

（くそう…なんて無防備なんだ）

コナンの目が思わず下のほうへ行く。あわてて顔へ視線を戻す。

（い、今俺は何をしようとした？ …いかん！）

目を閉じ、わずかに開いた口、ゆっくりとした呼吸…口紅もしていない唇なのに…

コナンは真っ赤になって後ろを向いた。

（な、何をやってるんだ俺は！）

もう一度振り返って哀を見る。

（待てよ、そういう俺は、こいつに見られてるんだ…いや、それどころじゃねえぞ！）

コナンはじつと哀の顔を見た。そして視線を体の下のほうへ向かって動かした。

手が意志とは関係のないように動いて…

「い、いかん…」

コナンは顔をぶるぶる振った。

「おい灰原、起きろ！ 風邪引くぞ！」

大声を出した。しかし、哀はまったく起きる気配がない。

「やろう…みてるよ」

コナンは変声機に口を当てた。

「久しぶりだな、シェリー」

思いつきりドスの利いたジンの声。しかし、哀はピクリともしなかった。

「おい、シェリー、起きろ！」

だめである。

コナンは哀の耳元に口を近づけた。

「シェリー、起きろ…起きないとお前のファーストキスを…って何言ってるんだ、俺は！」

ジンの声で一人芝居、自己嫌悪のあまり思わず後ずさる。

しかし、哀はなお穏やかな息のうちに静かに眠っていた。

コナンは、呼吸も心も乱れに乱れていた。

「はあはあ…ったく、何やってんだ、俺は…」

コナンは首を降りながら二階に上がると、毛布を持って降りてきた。

そして、眠り続ける哀にそっとかけた。

「ジンの声聞けば一発で起きるかと思ったが」

優しい表情で哀を見下ろす。

「少しは安心したのかな」

哀は目を覚ました。誰もいなかった。

かけられた毛布に気が付く。

「これは…工藤くんが？」

哀は起きあがると、ちらっと天井を見た。そこにはテレビカメラ。地下室に降りて、ビデオデッキに接続されたモニターに向う。

さきほどのコナンの行動が一部始終録画されていた。

「ふふ…睡眠薬を飲んだかいがあったわね…いいものを見せてもらったわ、工藤くん」

（おわり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7620d/>

小学生日誌番外編

2010年10月8日13時21分発行